

爽籟館主人・阿部房次郎の中国書画蒐集について

森橋 なつみ

はじめに

東洋の古芸術は隣邦支那のそれを以て冠とすること、動かすべからざる定評にして、支那三千年来の文明の精華は、其名工鉅匠の作品に由り象徴せらる。此等の珍什逸品が相踵いで起れる兵禍擾乱の爲め、或いは灰燼に帰し或いは散亡壊滅に就くもの甚多きは痛惜に堪へず。予は少壯の時より好古癖あり。繁劇なる業務の暇を以て支那書画を蒐集披翫するを樂とし、歲月の歴るの久しきに從ひ、不知不識の間に積んで度架に盈つるに至れり。^①

現在、大阪市立美術館に収蔵される「阿部コレクション」は、阿部房次郎（一八六八～一九三七）によって蒐集された中国書画一六〇件から成り、昭和十七年（一九四二）、子息の孝次郎氏によって一括寄贈された。世に名高い本コレクションの受贈は、当館にとつて大きな契機であり、爾来、収蔵品の中核としてありつつづけている。冒頭に掲げた房次郎のことは、収蔵の中国書画七〇件をおさめる

豪華図録『爽籟館欣賞』第一輯（昭和五年、一九三〇）に寄せられたものであり、ここに蒐集の動機が端的に述べられている。明治四十四年（一九一〇）、中国では辛亥革命にともなう混乱によって、清内府や有名収蔵家のもとから大量の文物が流出していた。「灰燼に帰し或いは散亡壊滅に就くもの甚多き」状況の中で、日本や欧米諸国の収蔵家が競うように中国文物の蒐集に乗り出し、房次郎もそういった流れに身を置いた。すでに知られているように、房次郎の主要な中国書画コレクションは、内藤湖南（一八六六～一九三四）や長尾雨山（一八六四～一九四二）ら碩学の協力の下、大阪・博文堂の仲介を経て形成されていった。^② その結果、唐から清末に至る歴代名家の逸品を擁した「阿部コレクション」が生まれたのである。

二〇一八年は房次郎の生誕一五〇年にあたる。大阪市立美術館では「阿部房次郎と中国書画」と氏の名を冠した記念の特集展示を企画し、併せて関連調査を行った。これまで伝記類などからわずかに窺い知ることができた事実が、具体的に裏付けられるようになってきた。本稿では、調査の過程で得られた知見を踏まえつつ、改めて阿部房次郎の中国書画蒐集について振り返ることとしたい。

阿部屋次郎について

阿部屋次郎は慶応四年一月十八日（明治元年二月十一日）、彦根藩士・辻兼三（一八四八〜一九二二）の長男として生まれた。生家は代々武家であったが、変わりゆく世間の先行きを案じた父の勧めで、商人としての研鑽を積んだ。二十歳を前に上京し、しばらくして福澤諭吉が教鞭をとる慶應義塾に入学、そこで学んだ「独立自尊」の精神を生涯心に留めたようである。なお、このころ一時的に村田姓を名乗っている。二十八歳の時、近江の巨商・三代阿部市太郎（一八四〇〜一九二三）の娘婿となり、以後は阿部姓を名乗るようになった（図1）。郷里にある竹生島に因んで笹洲と号し、齋号を爽籟館とした。

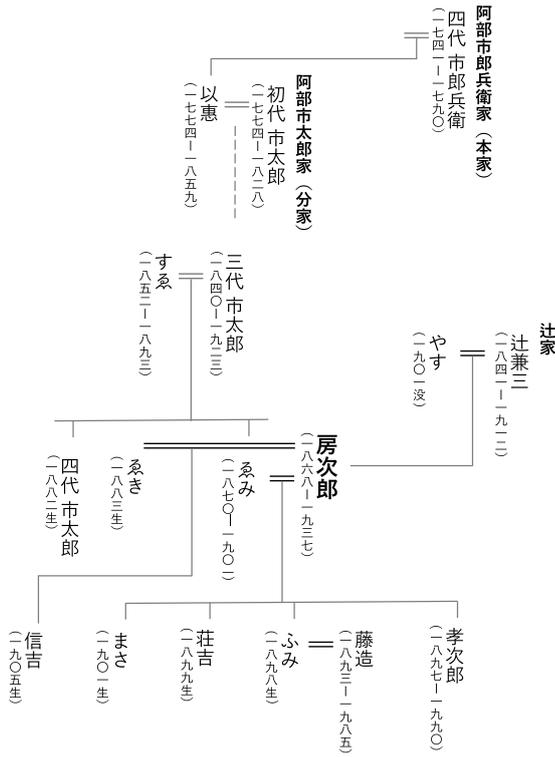


図1 家系図（筆者作成）

房次郎の半生は、実業家としての功績に彩られている。様々な事業で経験を積み、大正十五年（一九二六）、綿紡績で国内最大規模を誇り、産業界を牽引した東洋紡績株式会社の第四代社長に就任した。ほどなく功勞から従六位に叙され、昭和六年（一九三一）には貴族院議員に勅選されている。東洋紡績の社長時代、房次郎はちょうど還暦を迎え、公私ともに充実した時期であった（図2）。地位も名声も極まるなか、事業の傍らで情熱を注いだのが中国書画の蒐集である。



図2 房次郎とその家族（昭和4年1月元旦、住吉邸にて）

元来「好古癖」があったという房次郎が、自覚的に中国書画の蒐集を始める契機となったのは、大正十一年（一九二二）四月、東洋紡績株式会社の副社長時代に娘婿の阿部藤造を随行して赴いた約八ヶ月半にわたる欧米視察であった。綿産業の工場見学や各国の商工業の現状など事業のための視察が主であったが、その傍らで博物館一二ヶ所を訪れたという^③。この視察を経て房次郎は「精神文明の所産である芸術品を保有して国民性の涵養と人間味のある情操陶冶に資すること」が必要不可欠であるとし、当時の日本政府の姿勢が国内に芸術品を具えるうえで不十分であると感じたこともあり、自ら蒐集に乗り出したという^④。同じ東洋の民族である中国の書画に目を向け、これ以後とくに精力的な蒐集を行った。

昭和十年（一九三五）六月二十一日、房次郎は東洋紡績社長を辞任して会長となり、庄司乙吉（一八七三〜一九四四）が五代目社長を継いだ。このころ房次郎は、自身の収蔵品の将来について考えをめぐらしていたようである。

帝室博物館への作品寄贈

社長を辞任したこの年の九月、房次郎は東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）に寄贈をおこなった（図3）。清末の金石学者・陳介祺（一八一三〜一八八四）の旧蔵した中国古代の封泥五九一個と、その内の五五六件を収録する『封泥攷略』（呉式芬・陳介祺同輯、一九〇四年）十冊である。周知のとおり、陳介祺は商周青銅器はじめ、鉄器や銅鏡などの文物を大量に収集し、これを研究した。旧蔵品のうち、現存最長の篆書銘文が刻まれた毛公鼎（台北・国立故宫博物院所蔵）は特に名高い。鑑識眼の高さでも知られる陳氏旧蔵の

この封泥は、先秦・秦・前漢・新莽に渡る時期の官印と私印からなり、皇帝の印を押した希少な秦封泥の遺例「皇帝信璽」などが含まれている。陳介祺の没後、上海にあったようで、そこから日本に渡り、房次郎のもとへ帰した。

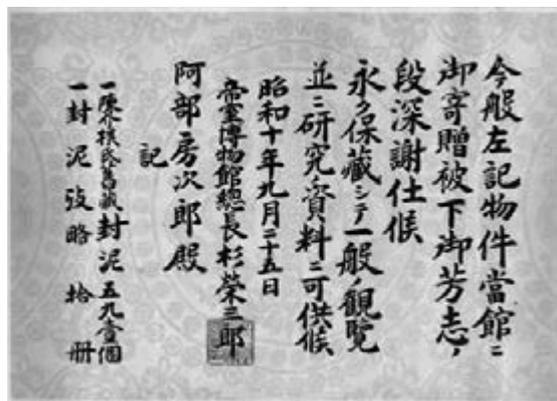


図3 帝室博物館からの礼状

外綿の武居綾蔵（一八七一〜一九三二）に帰したことを知り、武居の没後、入手したとする^⑤。大谷瑩誠は浄土真宗の僧であり、また内藤湖南らと親しく交わった東洋学者でもあった。中国文物の蒐集にも熱心で、そのコレクションは彼が学長を務めた大谷大学に寄贈され、今日も禿庵文庫として親しまれている。その中には古代封泥も含まれているため、瑩誠が情報を知っていたとしても不思議ではない。また武居綾蔵と房次郎は親交があり、没後に房次郎の元に帰した作品は他にもあることから、信憑性を感じられる。

一方、房次郎の作品購入を仲介していた博文堂・原田悟朗（一八

九三（一九八〇）の述懐は、少し様子が違うようである。既に八十と高齢であった原田本人からの昭和四十八年（一九七三）の聞書によれば、陳介祺旧蔵の封泥は、原田が上海の金頌清（一八七八―一九四一）の元で見出し、自ら日本へ持ち込んだという。金頌清は上海で中国書店を経営し、古書画を取り扱っていた。日本への仲介もしており、三井高堅（聴水閣、一八六七―一九四五）など著名な收藏家に拓本や書画を納めてたことが知られている。⁷博文堂との付き合いもあり、原田が金頌清のもとで封泥について見知ったとしても不思議ではない。原田によれば「これは大変なものだ」と思い、まず朝日新聞の上野理一（一八四八―一九一九）などをまわって、最終的に房次郎に紹介したという。実際に房次郎へ数多くの作品を仲介した本人からの証言であるので広く信用されているが、前者の伝記にある記述との差異は留意しておきたい。どちらの場合も上海にあったというので、原田が言うように金頌清が取り扱っていたのは正しいであろう。原田だけでなく、大谷瑩誠等も情報を得ていた可能性は十分にあるので、両者が同時に動いていたとも考えられるが、房次郎入手までの経緯が食い違うようである。現段階では結論を急がず、後考を俟ちたい。

いずれにしても、陳氏旧蔵の貴重な封泥コレクションを手にする事となった房次郎は、すぐに帝室博物館への寄贈手続きに入った。おそらく購入の時点からそのつもりであったのだろう。「自分が持っているより寄附して普く展覧した方が有意義だ」と語ったというが、房次郎はこの頃すでに『爽籟館欣賞』第一輯を上梓し、書画蒐集に注力するとともに収蔵品の体系的な整理に入っていた。自身の収蔵に加えることよりも、散逸を危ぶみ、しかるべき場所での保存

を考えた故であったのだろう。生前より「自分の蒐集にかかる支那書画は個人の占有に任かせず一般の鑑賞又は研究及び保存を目的とすべきである」と表明していたことから、帝室博物館への寄贈は房次郎の意に合うものであった。さらにこの封泥寄贈の同年、五月二十六日付で「我が蒐集の支那書画は趣味と保存の意よりなりしものなれば東京帝室博物館に寄贈し東洋美術保存の一助とすべし」と遺言しており、中国書画についてもすでに寄贈を決めていた。欧米視察を経て中国書画蒐集の意義を自覚し、自身の収蔵が「国家社会に役立つ時機」¹⁰について、房次郎は明確に見定めていたのである。

『爽籟館欣賞』の刊行と配布

現在、大阪市立美術館に収蔵される「阿部コレクション」は、中国書画一六〇件から成るが、これは昭和五年（一九三〇）および昭和十四年（一九三九）に刊行された豪華図録『爽籟館欣賞』第一、第二輯に所収される一六〇件の作品と一致している。第一輯にみる房次郎の小引では、

偶小間を得稍之が整理を行うに当り、知友諸君より頻りに之を景印せんことを慫慂せらる。但、予の所蔵書画は随見随得吾が好む所に従うに過ぎず、以て同好諸賢の顧眄に値するに足らず。然りと雖も燕石自珍敵帚千金は亦た癖好の情なり。且つ諸君の勧めを承け知己の雅に負くに忍びず、遂に手民に付し以て同好に頒ち、聊一粲を博せんとす。

と、謙遜しながらもこの出版の意義を語る。「画帖爽籟館欣賞刊行



図4 『爽籟館欣賞』第一輯

については前には内藤湖南先生、後には長尾雨山先生が主として配慮された⁽¹¹⁾といわれたように、

第一輯は湖南の力添えが大きかったようで、掲載作品の選定は内藤湖南が行い、解説は中国の画論画史を研究した伊勢専一郎（一八九四～一九四八）が担当した。湖南が阿部のもとに送った書状には「猶図録に入るべき御蔵

品に対する愚考は更に伊勢君に申置くべく御採否は別問題としてともかく正直に可申上候⁽¹²⁾とあり、湖南の意見が色濃く反映されていることがうかがわれる。周到な準備の末、第一輯には唐の王維「伏生授経図」から清の趙之謙「四時果实図」にいたる七〇件が収録され、博文堂から出版された。掲載の図版印刷はB3の大判に当時最新技術であったコロタイプを用い、装束は美術織物の名工・初代龍村平蔵（一八七六～一九六二）によって内藤湖南の題箋と張僧繇「五星二十八宿神形図巻」中の太白星が織り出されるという、大変豪華なものであった（図4）。豪華なばかりでなく、学術的にも非常に価値の高い書物として世に送り出したのである。

『爽籟館欣賞』第一輯はもとより非売品で、出版後は速やかに研究機関や研究者、好事家に博く配られた。海外も例外ではなく、

本社を大阪に置き世界進出を果たしていた美術商・山中商会が仲介して、欧米各地の主要な美術館、博物館ならびに大学や研究者に届けられた⁽¹³⁾。

続けて第二輯も出版される予定であったが、編集のさなかに指南役の内藤湖南が亡くなり、また房次郎自身も完成を見ることなく昭和十二年（一九三七）に没した。そのため子息の孝次郎が遺志を継いだ。盧溝橋事件にはじまる日中戦争のために徴兵されて一時中断し、昭和十四年（一九三九）ようやく刊行に至った。梁の張僧繇「五星二十八宿神形図」から清末の沈焯「観蓮図」まで九〇件を収める内容で、ここに「阿部コレクション」一六〇件の全容が公開されたのである。房次郎と同じ滋賀の生まれで、実業にも蒐集にも好友であった藤井善助（一八七三～一九四三）が、第二輯の出版にあたって寄せた言葉を引いておこう。

爽籟館欣賞第二輯成る、一度緋けば笙洲阿部君生前の面影眼前に髻髻たり。君業務多端晩年更に劇し、然かも本務を旺掌する傍ら嗜好趣味の赴く処時を割ひて善く文事を談ず。一度翰墨を語れば三伏の暑熱も刺肌も意とする処にあらず、互に胸襟を披きて亦激務を顧みず、真に春宵一刻価千金の快を感じるもの爽籟館の名に反かず、実に他の企て及ばざるものあり、篇中収むるところ各時代を通じて何れも完璧壯観比なし、吾有鄰館の名由来するところ徳不孤有隣と宜なり啓発せらるる処極めて大や、欣賞且つ感激措く能はざる処なり肅しみて所感を陳ぶ⁽¹⁴⁾。

公私にわたる房次郎の理解者として含蓄のある言葉である。

阪神大水害と大阪市立美術館への寄贈

昭和十二年（一九三七）、房次郎は脳溢血に倒れ、五月十二日、長逝した。数えて七〇を迎えた歳であった。『爽籟館欣賞』第二輯もまだ完成を見ぬ中、急なことであったようである。さらに時機悪く翌十三年に阪神を襲った大水害によって、房次郎が長年親しんだ住吉の邸宅も大きな被害に見舞われた。

昨年七月五日阪神地方を襲った大水害には自宅の大部分流失の悲運に会ったが、不思議にも家族の避難したる二階と書画を蔵



図5 奇跡的に難を逃れた蔵

した倉庫の階上のみは危うく難を免れて全きを得た。自分は全く神明の加護に依るものと信じてゐる。

これは孝次郎が『爽籟館欣賞』第二輯の小引に寄せた言葉であるが、邸宅のほとんどが流された中で幸運にも家族と書画が無事であった

という（図5）。

こうして難を逃れた一六〇件の書画は、遺言に従い、東京帝室博物館に納められるはずであった。しかしながら、帝室博物館は多少疑問のあるものについては受け取れず、それを省いたものだけ受贈したいという意向で折り合いがつかなかったという¹⁵⁾。結果、東洋紡績株式会社が本社を置き、房次郎にとっても所縁のある大阪にできた開館間もない大阪市立美術館に、「阿部コレクション」は昭和十七年（一九四二）、一括寄贈される運びとなった。

おわりに

父は余り多趣味の人ではなかった。趣味としては書画、散歩、読書ぐらいであった。その内でも書画の趣味は十分久しい以前からあって、晩年は支那のもの許りで、他のものには見向きもなかった様だ。日曜日などは座敷と倉庫との間を何辺となく往復して、飽くことを知らなかった。全く無我の境に入っていた。新しいものが一つ手に入ると、「これで又当分楽しめる。」と云って喜んでいた。半日ぐらいはじつと一つの画を眺めたり、書物を調べたりしていることは珍しくはなかった。事実、東洋美術に対しては、非常な鑑識眼と無限の愛着とを持っていた。又特に支那の画に就いては、殊に其晩年には、鑑識眼に就いては一家の見識を持つてゐた様である。¹⁶⁾

本稿では、阿部房次郎の中国書画蒐集について、その意義を再検討するため当人や関係者の言説をたどりながら振り返った。ここに引いた孝次郎氏の言葉にあるように、一方では純粋な書画愛好であ

り、一方では東洋美術の愛護や国家社会への貢献という大志に突き動かされたものであった。二〇一八年、氏の生誕を振り返る展覧会の開催とその関連調査を契機として、これまで確認できていなかった新資料が見いだされ、現在その調査研究を進めている。研究は緒に就いたばかりであるが、今後さらなる検討を加え、近代日本における阿部房次郎の中国書画蒐集の意義と阿部コレクションの価値について考察を深めていきたい。

(大阪市立美術館学芸員)

【図版出典】 図2、3、5は関係者よりご提供いただいた。図4は筆者撮影。

【註】

- 1 原文の旧字体を便宜のためここでは新字体に改めた。以下、引用文は同様。
- 2 阿部コレクションの形成については、以下の文献も合わせて参照されたい。曾布川寛監修『中国書画探訪 関西の収蔵家とその名品』（二玄社、二〇一一年）、弓野隆之「阿部コレクションの形成とその特質」『国際シンポジウム報告書 関西中国書画コレクションの過去と未来』（関西中国書画コレクション研究会、二〇一二年三月）。
- 3 熊川千代喜『阿部房次郎伝』（以下、『伝』とする。阿部房次郎伝編纂事務所、一九四〇年）、四〇五頁。
- 4 『伝』三六〇頁。
- 5 『伝』三七五、三七六頁。以下、当該箇所を引く。「翁（房次郎 ※筆者注）は、既に、その生前に東京上野の帝室博物館に、貴重なるものを寄付している。封泥五九一個、封泥攻略十冊が則ち其れである。「中略」此の封泥は、最初、翁がこれを大谷登誠師から伝え聞き、直ちに上海に人を出し、買い求めにかかったところ、其時遅く彼時早く、それがだれかの手に移って大いに翁を失望せしめた。ところがその後には右（封泥 ※筆者注）は内外綿会社の武居綾藏氏の許にあることが判り、武居氏の没後、翁の手に帰したが、翁は「自分が持っているより寄附して普く展覧した方が有意義だ」として、直ちに右博物館（東京帝室博物館 ※筆

者注）への手続きを執ったのであった」。

- 6 鶴田武良「原田悟朗氏聞書 大正―昭和初期における中国画コレクションの成立」『日中国交正常化二〇周年記念 中国明清名画展』図録、財団法人日中友好会館、一九九二年。ここには房次郎の作品入手の経緯などが詳細に述べられており、阿部コレクションの形成を知るうえで、基本的な文献の一つである。以下、封泥の入手に触れる部分を引く。「いつでしたか、上海の金頌清さんのところで陳介祺旧蔵という封泥を見て、これは大変なものだと思ったから、持ってきて上野（理一）さんにお見せした。そうしたら上野さんは、ちょっと触っても毀れそうだから折角だけどやめる、とおっしゃる。当てが外れたんです。それで東京に行って二、三の方にお見せしたが誰も取らない。ものがものでしょ、持って歩くたびに気が気ではないんですよ。毀れはしないかと思って。ちょうど夏で、阿部さんが信州（長野）の私どもの別荘にいらした。「中略」それで私、東京から信州に廻って持っていったんです。そうしたら阿部さんは、自分分は分らんけれどもそれは貴重なものにちがいないから、金を出すから買って、ここは東京が近いから東京の帝室博物館にでも寄付したらどうか知らん、君の考えはどうだっておっしゃるんです。それで、それは結構なこと東博でも喜ばれると思う、と行ってあそこへ寄付されたんです」。
- 7 金頌清が将来した作品については以下の論考を参照。富田淳「槐安居コレクションと聴水閣コレクション―高島菊次郎氏と三井高堅氏―」『国際シンポジウム報告書 関西中国書画コレクションの過去と未来』（関西中国書画コレクション研究会、二〇一二年三月）。
- 8 前掲注5引用文参照。また前掲注6の原田の言葉からも同様の意図があったことがうかがえる。
- 9 『伝』三七二頁。
- 10 『伝』三六一頁。「私は書画の方面に特に目をつけ、蘇東坡、黄山谷、趙子昂、王維黄、奎李成、薰北苑（原文ママ、正しくは王維、黄筌、李成、董北苑 ※筆者注）等のものが手に在る。これが国家社会に役立つ時機は何れの日か」とある。
- 11 『伝』四四九頁。
- 12 『伝』三六二頁。ここに収録される湖南の手紙は六月二十二日付であるが、年代がはっきりしない。文中では大正十四年ごろと推測している。
- 13 関係者のもとに、当時の受領書や札状が数十通保管されており、房次郎

14 が『爽籟館欣賞』の出版と頒布に強い情熱を傾けていたことがしのばれる。
『伝』三七二頁。

15 この経緯については以下の文献に触れられている。村松寛『美術館散歩』
(河原書店、一九六〇)、望月信成『美術館の二十四年(3)』『美をつくし』

五(大阪市立美術館、一九五九年七月)。

16 阿部孝次郎「父の思出」『伝』四五九、四六〇頁。

〔付記〕本稿執筆にあたり、ご遺族はじめ関係各位には多くのご助言・ご助力を賜りました。ここに記して深謝の意を表します。

阿部房次郎 関連年表

(主な参考文献)

熊川千代喜編『阿部房次郎伝』(1940)、東近江市史能登川の歴史編集委員会編『東近江市 能登川の歴史』第3巻 近代・現代編(2014)

元号	西暦	干支	年齢	事項	関連事項(産業関係)	一般事項
慶應4/ 明治元	1868	戊辰	1	1月18日(新暦2月11日)、彦根藩士である辻兼三(1841-1912)の長男として近江国犬山郡彦根町中藪(彦根市中藪町)に生まれる。		戊辰戦争起こる。 9月8日(新暦10月23日)、明治に改元。
明治2	1869	己巳	2			
明治3	1870	庚午	3			
明治4	1871	辛未	4			
明治5	1872	壬申	5			
明治6	1873	癸酉	6			
明治7	1874	甲戌	7			
明治8	1875	乙亥	8	彦根第七区明道学校へ入学。		
明治9	1876	丙子	9			
明治10	1877	丁丑	10			
明治11	1878	戊寅	11			
明治12	1879	己卯	12	近江商人の山中利右衛門(神崎郡五個荘町)のもとへ奉公にあがる。		
明治13	1880	庚辰	13			
明治14	1881	辛巳	14			
明治15	1882	壬午	15		5月、大阪紡績株式会社設立(大阪市西成郡三軒家村、現大正区)。発起人は洪沢栄一、大倉喜八郎、益田孝、藤田傳三郎、松本重太郎ら。	
明治16	1883	癸未	16			
明治17	1884	甲申	17			
明治18	1885	乙酉	18			
明治19	1886	丙戌	19	山中家の支援により上京。東洋英和学校(麻布鳥居坂)へ入学。	11月、三重紡績株式会社設立。	
明治20	1887	丁亥	20		5月、東京綿商社(のちの鐘淵紡績)設立。	
明治21	1888	戊子	21	学校当局と衝突し、ストライキを起こしたことにより退学。	8月、金巾製織株式会社設立(発起人:第七代阿部市郎兵衛、阿部周吉、小泉新助、中村治兵衛、西川貞二郎ら)。	
明治22	1889	己丑	22	慶應義塾に入学。		
明治23	1890	庚寅	23		3月、金巾製織株式会社の事務所を大阪府西成郡野田村字嬉ヶ崎(大阪市此花区)に移転。 5月、阿部製紙所設立(出資者:阿部市郎兵衛、阿部彦太郎、阿部市太郎、宮川彦一郎)。	
明治24	1891	辛卯	24			
明治25	1892	壬辰	25	慶應義塾を卒業。帰郷して彦根の実家(中藪から池須町に移居)を訪問した後、山中家へ戻る。		
明治26	1893	癸巳	26			
明治27	1894	甲午	27	近江銀行行員となる。	近江銀行(発起人:山中利右衛門、小泉新助、伊藤忠兵衛、下郷伝平、中村治兵衛、堤惣平、阿部周吉、田村正寛ら)の発足。	日清戦争勃発。
明治28	1895	乙未	28	11月27日、三代阿部市太郎(1840-1923)の長女ゑみと結婚。これより阿部姓を名乗る。		4月17日、日清講和条約(下関条約)締結。
明治29	1896	丙申	29	3月、阿部家へ婿養子として正式に籍を移し、翌4月能登川村242番(東近江市能登川町)へ分家として屋敷を構える。		
明治30	1897	丁酉	30	1月3日、長男孝次郎生まれる。	1月、山辺丈夫(1851-1920)が大阪紡績株式会社の社長に就任。	
明治31	1898	戊戌	31	長女ふみ生まれる。		
明治32	1899	己亥	32	次男荘吉生まれる。		
明治33	1900	庚子	33	能登川の近江製油株式会社の取締役となる。		義和団事件(庚子事変)起こる。
明治34	1901	辛丑	34	次女まさ生まれる。 3月、阿部製紙合資会社の専務取締役となる。 8月21日、産褥熱のため夫人ゑみ逝去。		
明治35	1902	壬寅	35			
明治36	1903	癸卯	36	3月、実業家の宮川彦一郎(愛知郡中宿村)の妹恵喜子と再婚する。		
明治37	1904	甲辰	37	6月、金巾製織株式会社の常務取締役となる。		日露戦争勃発。
明治38	1905	乙巳	38	三男信吉生まれる。	10月、大阪に江商合資会社設立。	9月、ポーツマス条約締結。
明治39	1906	丙午	39	6月、大阪紡績株式会社の専務取締役となる。	6月、金巾製織株式会社を大阪紡績会社に合併。	
明治40	1907	丁未	40	3月、富士製紙株式会社の監査役となる。	3月、阿部製紙合資会社を富士製紙株式会社に合併する。	
明治41	1908	戊申	41			
明治42	1909	己酉	42			
明治43	1910	庚戌	43			
明治44	1911	辛亥	44			10月10日、武昌起義の発生。辛亥革命起こる。

明治45/ 大正元	1912	壬子	45			1月1日、中華民国成立。 2月12日、宣統帝(溥儀)退位、清朝が滅ぶ。
大正2	1913	癸丑	46	12月、樺太工業株式会社の取締役となる。	12月、樺太工業株式会社設立。社長は大川平三郎。	
大正3	1914	甲寅	47	6月、東洋紡績株式会社の専務取締役となる。	6月、大阪紡績株式会社と三重紡績株式会社を合併し、東洋紡績株式会社を設立する。社長は山辺丈夫。	第一次世界大戦勃発。
大正4	1915	乙卯	48			
大正5	1916	丙辰	49		5月、東洋紡績株式会社社長の山辺丈夫が辞任し、伊藤伝七が二代目社長に就任。	
大正6	1917	丁巳	50		1月、江商株式会社設立。	
大正7	1918	戊午	51			
大正8	1919	己未	52			
大正9	1920	庚申	53		5月14日、山辺丈夫逝去。 6月、東洋紡績株式会社社長の伊藤伝七が辞任し、専務であった齋藤恒三が三代目社長に就任。	
大正10	1921	辛酉	54	11月、東洋紡績株式会社の専務から副社長へ昇任。		
大正11	1922	壬戌	55	4月、娘婿の阿部藤造を随行し、欧米視察に赴く。8カ月半にわたる視察で各国の工場62所および博物館129所を訪れる。		
大正12	1923	癸亥	56		9月、東洋紡績王子工場(東京都北区堀船)が被災する。	9月1日、関東大震災発生。
大正13	1924	甲子	57			
大正14	1925	乙丑	58			4月1日、大阪市、第二次市域拡張によって人口211万となり、東京市を上回り日本一となる。
大正15/ 昭和元	1926	丙寅	59	6月、東洋紡績株式会社の四代目社長に就任する。		
昭和2	1927	丁卯	60		1月22日、専務取締役の岡常夫(1863-1927)が逝去。 春、金融恐慌により近江銀行が破綻。翌年解散し昭和銀行に合併。	
昭和3	1928	戊辰	61	1月18日、還暦を迎える。 3月、昭和レーヨン株式会社の取締役社長に就任。 11月10日、紡績業界の功労を称えられ、従六位に叙される。 12月11日、実業功労者として御大礼に関する宮中の御饗宴に召される。	3月、東洋紡績株式会社の子会社昭和レーヨン株式会社を創設。 12月、岡常夫の遺贈金と関係者の寄付によって日本綿業倶楽部設立。	
昭和4	1929	己巳	62	6月13日、早稲田大学大隈大講堂において「日本紡績業発達の経路」と題した講演をおこなう。 6月27日、裕豊紡績株式会社の取締役社長を務める。	6月27日、東洋紡績上海工場を分離し、裕豊紡績株式会社を設立する。	
昭和5	1930	庚午	63	3月5日、『爽籟館欣賞』第一輯刊行。		
昭和6	1931	辛未	64	12月12日、日本産業発展の功労者として貴族院議員に勅撰される。		9月18日、柳条湖事件を端緒に満州事変勃発。
昭和7	1932	壬申	65		1月1日、日本綿業倶楽部の施設である綿業会館(大阪市中央区船場、2003年に重要文化財指定)が開館。	2月18日、満州国独立を宣言。 5月15日、犬養毅(1855-1932)暗殺。
昭和8	1933	癸酉	66	5月18日、王子製紙の取締役となる。	5月8日、富士製紙株式会社と樺太工業株式会社を王子製紙に合併。	
昭和9	1934	甲戌	67			3月、満州国成立。 6月26日、内藤湖南(1866-1934)逝去。
昭和10	1935	乙亥	68	6月21日、東洋紡績社長を辞任。庄司乙吉(1873-1944)が五代目社長となり、房次郎は会長となる。 9月25日、帝室博物館(現東京国立博物館)に陳介祺(1813-1884)旧蔵の中国古代の封泥591個と『封泥攷略』(呉式芬・陳介祺同輯、1904年)10冊を寄贈する。 10月29日、貴族院の視察団一行に加わり、約一カ月をかけて台湾および江南各地を旅行。		
昭和11	1936	丙子	69			5月11日、大阪市立美術館落成。
昭和12	1937	丁丑	70	5月12日、阿部房次郎逝去。墓所は京都・西大谷(大谷本廟)。		
昭和13	1938	戊寅		7月、六甲山の山津波により住吉(神戸市東灘区)の阿部家邸宅が被災。奇跡的に中国書画を収めた蔵は難を逃れる。		7月、阪神大水害発生。
昭和14	1939	己卯		1月、長男孝次郎により『爽籟館欣賞』第二輯刊行。		第二次世界大戦勃発。
昭和15	1940	庚辰		4月、『阿部房次郎伝』(熊川千代喜編、庄司乙吉序)刊行。		
昭和16	1941	辛巳				
昭和17	1942	壬午		12月、房次郎旧蔵の中国書画160件が大阪市立美術館に寄贈される。		4月1日、長尾雨山(1864-1942)逝去。

大阪市立美術館所蔵 阿部房次郎旧蔵中国書画（阿部コレクション）総目録

No.	時代	作家名	作品名	形式	大美No.	(一)	(二)
1	梁	張僧繇	五星二十八宿神形図	巻	1-121		1
2	唐	王維	伏生授經図	巻	1-123	1	
3	唐	盧稜伽	渡水僧像	軸	1-001	2	
4	唐	呉道玄	送子天王図	巻	1-122		2
5	五代	韓虬	猷香菩薩像	軸	1-002		3
6	五代	徐熙	雛鶻葉苗図	軸	1-008		4
7	五代	曹仲元	慈氏菩薩像	軸	1-006		5
8	五代	張元	大阿羅漢像	軸	1-004	3	
9	五代	滕昌祐	白鷗春水図	軸	1-003	4	
10	五代	左礼	水官像	軸	1-005	5	
11	五代	黄筌	竹鶴図	軸	1-009	6	
12	五代	周文矩	玉步搔仕女図	軸	1-007	7	
13	北宋	李成・王曉	詭碑窠石図	軸	1-012	8	
14	北宋	董源	雲壑松風図	軸	1-010		6
15	北宋	巨然	烟浮遠岫図	軸	1-011		7
16	北宋	郭忠恕	明皇避暑宮図	軸	1-013	9	
17	北宋	燕文貴	江山樓觀図	巻	1-124	10	
18	北宋	孫知微	伏羲像	軸	1-014	11	
19	北宋	許道寧	幽林樵隱図	軸	1-015		8
20	北宋	許道寧	雪山樓觀図	軸	1-016		9
21	北宋	易元吉	白鶴図	軸	1-017	12	
22	北宋	易元吉	聚猿図	巻	1-125		10
23	北宋	武洞清	女仙像	軸	1-022		11
24	北宋	呉元瑜	梨花黄鶯図	軸	1-019		12
25	北宋	文同	墨竹図	軸	1-018		13
26	北宋	蘇軾	李白仙詩	巻	1-126	13	
27	北宋	米芾	烟雲松壑図	軸	1-020		14
28	北宋	徽宗	晴麓横雲図	軸	1-021		15
29	北宋	胡舜臣・蔡京	送郝玄明使秦書画合璧	巻	1-127		16
30	北宋(金)	宮素然	明妃出塞図	巻	1-128	14	
31	南宋	米友仁	遠岫晴雲図	軸	1-023		17
32	南宋	牧谿(釈法常)	寒山図	軸	1-025		18
33	南宋	牧谿(釈法常)	日黒達磨図	軸	1-026	15	
34	南宋	馬遠	松岸高逸図	軸	1-024	16	
35	南宋	梁楷	十六応真図	巻	1-129	17	
36	南宋	龔開	駿骨図	巻	1-131	18	
37	南宋	鄭思肖	画蘭	巻	1-132		19
38	南宋	作者不詳	十六羅漢図	軸	1-114	19	
39	宋	無名氏(宋元名家)	名賢宝絵冊	冊	1-157		20
40	宋	無名氏(宋人)	濯足万里流図	軸	1-116		21
41	宋	無名氏(伝荆浩)	秋山瑞靄図	軸	1-115		22
42	宋	無名氏(宋人)	雲壑高士図	軸	1-119		23
43	宋	無名氏(宋人)	山水図	軸	1-120		24
44	宋	無名氏(伝王維)	護法天王図	巻	1-159		25
45	宋	無名氏(伝李龍眠)	臨廬鴻草堂十志図	巻	1-160		26
46	宋	無名氏(宋人)	秋江漁艇図	軸	1-118		27
47	宋	無名氏(伝黄筌)	寒梅鷓鴣図	軸	1-117		28
48	宋	無名氏(宋人)	散牧図	巻	1-158		29
49	元	趙孟頫	子母図	巻	1-133		30
50	元	趙孟頫	墨竹図	軸	1-029	31	
51	元	管道昇	仿呉道子魚籃観音像	軸	1-030	32	
52	元	銭選	石勒問道図	巻	1-130		33
53	元	銭選	品茶図	軸	1-027	20	
54	元	王淵	竹雀図	軸	1-033	21	
55	元	柯九思	横竿晴翠図	軸	1-041		34
56	元	劉因	秋江漁艇図	軸	1-028		35
57	元	呉鎮	湖船図	軸	1-031	22	
58	元	黄公望	江山清興図	巻	1-134		36
59	元	倪瓚	溪亭秋色	軸	1-035		37
60	元	盛懋	松陰高士図	軸	1-032	23	
61	元	倪瓚	疏林図	軸	1-036	24	
62	元	王蒙	江皐煙嵐図	巻	1-135	25	
63	元	王蒙	松壑雲濤図	軸	1-040		38
64	元	張中	垂楊双燕図	軸	1-034		39
65	元	方從義	太白瀧湫図	軸	1-038		40
66	元	柴棨	秋山曳杖図	軸	1-037		41
67	元	馬琬	夏山欲雨図	軸	1-039		42
68	明	徐賁	春雲疊嶂図	軸	1-042		43
69	明	王紱(沈周・陳淳合装)	為密齋写山水図	巻	1-136		44
70	明	戴進	松岩蕭寺図	軸	1-044		45
71	明	金湜	双鉤竹図	軸	1-045		46
72	明	周砥	長林幽溪図	軸	1-043	26	
73	明	沈周	幽居図	軸	1-049	27	
74	明	沈周	大石山図	巻	1-138	28	
75	明	沈周	仿北苑山水図(靈隠旧遊図)	軸	1-048		47
76	明	沈周	月下弹琴図	軸	1-047		48
77	明	沈周	菊花文禽冊	軸	1-046		49
78	明	沈周	呉中名勝冊	冊	1-137		50

- ・本目録は、昭和17年(1942)に当美術館へ寄贈された阿部房次郎氏旧蔵の中国書画全160件を掲載するものである。
- ・作品・作家の時代区分は『爽籟館欣賞』(第一・二輯)に拠り、これに従って配列した。
- ・作家名や作品名称は作品に付随する旧伝や『爽籟館欣賞』、美術館の蔵品図録などで若干異同があるが、ここでは現在の美術館での呼称に拠り、補足的に別称を括弧内に示した。
- ・大美No.とは、『大阪市立美術館蔵品図録Ⅰ』(鶴田武良編、昭和45年/1970)において付された整理番号であり、軸・卷子・冊頁に大別し、作家の別で概ね時代順に配したものである。なお、欄に色付けのあるものは、「生誕150周年記念 阿部房次郎と中国書画」展に出陳した作品であることを示す。
- ・(一)は『爽籟館欣賞』第一輯、(二)は第二輯に収録された作品を挙げた項目であり、それぞれの掲載番号によって示した。なお、大阪市立美術館の阿部コレクション160件と『爽籟館欣賞』に収録されている作品は一致しており、第一輯に70件、第二輯に90件が載る。
- ・本目録の編集は、森橋なつみ(当館学芸員)による。

79	明	唐寅	梅花图 (一枝春图)	軸	1-051		51
80	明	唐寅	待隱園图	卷	1-139	29	
81	明	唐寅	溪橋策杖图	軸	1-050		52
82	明	文徵明	黃華幽石图	軸	1-054	30	
83	明	文徵明	枯木竹石图	軸	1-053	31	
84	明	文徵明	雲山图	軸	1-052		53
85	明	文徵明	蘭竹图	卷	1-140		54
86	明	陳淳	雲白山青图	卷	1-141		55
87	明	陳淳	松菊图	軸	1-055		56
88	明	仇英	九成宮图	卷	1-142	32	
89	明	文嘉	琵琶行图	軸	1-056		57
90	明	徐渭	拜孝陵詩意图	軸	1-058	33	
91	明	莫是龍	溪雨初霽图	軸	1-057		58
92	明	李士達	寒林鍾馗图	軸	1-059		59
93	明	邢侗	文石图	軸	1-060	34	
94	明	董其昌	傲北苑夏山欲雨图	軸	1-061	35	
95	明	董其昌	盤谷序書画合璧	卷	1-143		60
96	明	趙左	竹院逢僧图	軸	1-062	36	
97	明	卞文瑜	靜居图	軸	1-070	37	
98	明	文從簡	江山平遠图	軸	1-063	38	
99	明	張瑞圖	拔嶂懸泉图	軸	1-066		61
100	明	王建章	雲嶺水声图	軸	1-065		62
101	明	黃道周	松石图	卷	1-145	39	
102	明	黃道周	墨菜图	卷	1-144		63
103	明	楊文驄	秋林遠岫图	軸	1-068		64
104	明	何騰蛟	高士觀瀑图	軸	1-069		65
105	明	藍瑛	松巖話古图	軸	1-064	40	
106	明	倪元璐	文石图	軸	1-067	41	
107	明	邵彌	雲山平遠图	卷	1-148	42	
108	清	弘仁 (漸江)	古柯寒篠图	軸	1-071		66
109	清	道濟 (石濤)	仿倪雲林山水图	頁	1-082	43	
110	清	道濟 (石濤)	幽泉殘雨图	軸	1-081		71
111	清	道濟 (石濤)	東坡時序詩意图冊	冊	1-150		72
112	清	朱耷 (八大山人)	彩筆山水图	軸	1-080	44	
113	清	龔賢	書画合璧冊	冊	1-149	45	
114	清	王槩	傲巨然聽泉图	軸	1-085	46	
115	清	王時敏	墨筆山水图	軸	1-072	47	
116	清	王鐸	書画合璧	卷	1-146	48	
117	清	王鑑	傲古山水冊	冊	1-147	49	
118	清	傅山	倒生栢图	軸	1-075	50	
119	清	傅山	斷崖飛帆图	軸	1-074		67
120	清	髡殘 (石谿)	秋江間渡图	軸	1-077		68
121	清	祁豸佳	山窓寄傲图	軸	1-073		69
122	清	顧大申	老松飛瀑图	軸	1-076		70
123	清	毛奇齡	看竹图	軸	1-079	51	
124	清	笪重光	柳陰釣船图	軸	1-078	52	
125	清	吳歷	江南春色图	卷	1-152	53	
126	清	吳歷	傲古山水冊	冊	1-153		73
127	清	王翬	仿巨然·王蒙山水图	軸	1-083	54	
128	清	王翬	仿李營丘江山雪霽图	卷	1-151		74
129	清	王原祁	林壑幽栖图	軸	1-084	56	
130	清	惲壽平	花卉冊	冊	1-154	55	
131	清	上睿	雪景山水图	軸	1-100		75
132	清	蔣廷錫	藤花山雀图	軸	1-098		76
133	清	高其佩	天保九如图	軸	1-086	57	
134	清	李鱣	風荷图	軸	1-091	58	
135	清	高鳳翰	枯樹寒鴉图	軸	1-088	59	
136	清	高鳳翰	草堂藝菊图	軸	1-090		77
137	清	高鳳翰	老松图	軸	1-089		78
138	清	高鳳翰	指画冊	冊	1-156		79
139	清	弘晷	高士觀瀑图	軸	1-103		80
140	清	郎世寧	虎图	軸	1-097	60	
141	清	金廷標	春元瑞兆图	軸	1-102	61	
142	清	華岳	秋声賦意图	軸	1-087	62	
143	清	華岳	人物山水图冊	冊	1-155		81
144	清	張庚	竹林图	軸	1-092	63	
145	清	張宗蒼	万笏朝天图	軸	1-093	64	
146	清	黃慎	仙子漁者图	軸	1-094	65	
147	清	金農	羅漢图	軸	1-096		82
148	清	金農	驢驢图	軸	1-095		83
149	清	董邦達	長林密壑图	軸	1-099		84
150	清	錢載	臨蘇東坡雨竹图	軸	1-105		85
151	清	翟大坤	高士聽泉图	軸	1-108		86
152	清	蔡嘉	古木寒鴉图	軸	1-101	68	
153	清	沈宗騫	山水图	軸	1-104		87
154	清	潘恭壽	雪中山水图	軸	1-106	66	
155	清	奚岡	傲大癡山水秋山图	軸	1-107	67	
156	清	伊秉綏	孤鶴图	軸	1-109		88
157	清	錢杜	虞山草堂步月詩意图	軸	1-110	69	
158	清	湯貽汾	菘廬問字图	軸	1-111		89
159	清	趙之謙	四時果实图	軸	1-112	70	
160	清	沈焯	觀蓮图	軸	1-113		90